

**小規模中学校における学び合う教員集団づくり
ー相互授業参観を核とした校内研修を通してー**
茂木 亜希子
(教職リーダーコース E213C004)

I 研究の背景と課題の設定

1 問題の所在

中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(2021)は、個々の教師が養成段階に身に付けた知識・技能だけで教職生涯を過ごすのではなく、継続的に新しい知識・技能を学び続けていくことが必要であることを指摘している。学校で学び続ける場としては「校内研修」が位置づけられており、教師が、時代の変化に対応して求められる資質・能力を身に付けていくため、「校内研修」の充実が求められていると言える。

2 勤務校の実態

本研究の対象となる勤務校は、生徒数56名、学級数4学級(通常学級3学級、特別支援学級1学級)、県費負担教職員数11名の小規模校である。勤務校のような小規模校の課題として、文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き」(2015)では、「教職員1人あたりの校務負担や行事に関わる負担が重く校内研修の時間が十分確保できない」「教員同士が切磋琢磨する環境を作りにくく、指導技術の相互伝達がなされにくい」ことが挙げられている。つまり、小規模校では、校内研修の時間の確保や教員同士が学び合う機会の設定に課題を抱えていると捉えることができる。

勤務校の校内研修は、研修内容に関する資料の共有や知識伝達型の研修など、受動的な研修が中心であり、「教師が学び続ける場」として機能しているとは言い難い状況が見られた。校内研修がうまく機能しない要因として、校内研修の運営の仕方だけでなく、教職員数が少ないことの影響があると考えられる。実践研究に取り組むにあたって勤務校で教職員対象に実施した「勤務校の強みと弱み」についての聞き取り調査の結果からは、勤務校では教員数が少ないことを「弱み」として捉え負担に感じている一方、「魅力」にも目を向け教育活動を行っていることが明らかになった。また、校内研修を機能させていくためには、教員数が少ないことによる「弱み」に働きかけることが必要であることが明確となった。

勤務校においても一般的な小規模校と同様の課題が見られ、教員の協力体制が築きやすく、本来ならば教員相互の学び合いを行いやすい環境であるにも関わらず、現状は学び合う機会がなく、学び合いも深まらない状況が生じていると考える。

3 先行研究の検討

(1) 校内研修

教員相互の学び合いを充実させていくために、加藤(2019)は、校内研修において協働体制を整備し、協働過程(RPDCAサイクル)の協働的省察の場でコミュニケーションの質や形態の変革を促すことにより、教員間に協働文化が形成され始めたことを報告している。

浦野・南部(2017)は、ワークショップ型の研修会を取り入れた公立中学校での校内授業研修の活性化事例を分析し、一人1授業の実践と相互授業参観、ワークショップ型の授業研究会の有効性を指摘している。

こうした先行研究・実践から、校内研修の内容を見直し、協働的に実施していくことに

より、学び合う教員集団づくりを行うことができると考えられる。

(2) 教員の協働化を促進するための方策

教員の協働化を促進するための方策として、佐古他（2011）は、「教育活動の良循環サイクル」を教員間で共有することを示している。すなわち、「児童生徒の実態に関する認識を揃え、それにもとづく課題を集団的・組織的に生成し、さらに実践の経過と成果を検証し合う一連のプロセスを共有すること」である。また、佐古他（2011）は、協働化のためには、学校組織の体制や運営について、①「学校の児童生徒の実態と課題、実践とその成果に関する情報と共有を行う場を学校の『コア・システム』と位置づけ、その場が組織的に機能しうよう、時間の確保、教員の配置などの資源の投入を行うこと」、②「コア・システムにおいて交換され検討された結果を整理し集約して、教員にフィードバックする協働プロセスの支援機能（PFチームの支援機能）を整えること」の2つの条件を満たすことが必要と指摘している。

生徒の実態の把握から、課題の生成、実践、実践の検証・評価の一連のプロセスを共有する場を設定し、丁寧に教育活動を進めていくことにより、教員同士の学び合いが促進され、教員個々の成長につながっていくことが期待できる。この「教育活動の良循環サイクル」を教員の相互作用の中で展開していく組織体制を構築するとともに、すでに存在している勤務校の組織体制や運営を見直し、佐古他（2011）の示している2つの条件を満たすよう修正していくことが有効と考えられる。

4 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

一人1授業の公開・相互授業参観・授業研究会を全職員で実施する協働的な校内研修を通して、学び合う教員集団づくりを行うことを目的とする（図1）。

(2) 研究の方法

段階	内容
第1段階	生徒の実態を共有し、課題を生成するプロセスを全職員で実施し、「目指す生徒像」を確立し、研修テーマを共有する。
第2段階	研修テーマに基づく一人1授業の公開、相互授業参観、授業研究会を全職員で実施することで、実践の共有を図る。

表1 研究の進め方

校内研修を充実させていくために「①課題決定のプロセスを全教員で担う、②実践・実践の評価・検証を計画的に行う、③研修にワークショップ型研修を取り入れる」ことを手立てとしていく。本研究は、実践の準備と実践の2段階に分けて、2021年度から2022年度の2年間で実施していく（表1）。

【課題決定のプロセスを全教員で担う】

第1段階として、2021年度中に次年度の校内研修について全教員で一緒に考える場を設定し、研修テーマの共有を図る（図2）。また、このテーマについては2022年度に行われる実践・実践の評価・検証などにおいても全教員が研修の目標を常に意識できるようにする。

【実践・実践の評価・検証を計画的に行う】

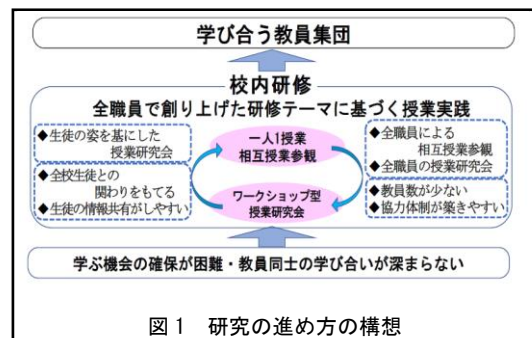


図1 研究の進め方の構想

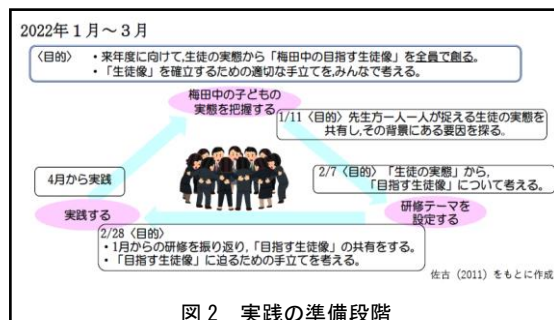


図2 実践の準備段階

第1段階で創り上げた「研修テーマ」に基づき、一人1授業の公開、相互授業参観、授業研究会を全教員で実践し、共有していく。実践にあたり、一人1授業の公開を一人ずつ順番に実施し、全教員がリレーのバトンをパスするように次の教員へとつないでいくことにより、学び合いを深めていく。その際、校内研修全体会を「学校の生徒の実態と課題、実践とその成果に関する情報と共有を行う場」とし、研修委員会を「協働プロセスを支援する機能」として、交互に実施する。特に、初期段階の研修委員会では、まず「校内研修全体会の協議内容を整理・集約し、教員にフィードバックすることで、協働プロセスを推進する場」「校内研修全体会を実施するための打ち合わせやリハーサルを行うなどの準備をする場」の2つの機能をもたせていく。

【ワークショップ型研修】

校内研修では、ワークショップ型研修を取り入れ、生徒の実態を共有し、課題を明確化していく。そこから、目指す生徒像を確立し、「研修テーマ」を一緒に創り上げるプロセスを共有していく。研修委員会では、校内研修全体会での協議内容を整理・集約し、教員にフィードバックすることで、協働プロセスを推進させていく。

II 研究の実践

1 実践のための準備段階（2021年度）

〈校内研修全体会〉

準備段階では、校内研修全体会を3回実施し、その中で4つのワークショップを行った。ワークショップでは、付箋紙を共有しながら話が盛り上がる様子や、意見を聞くときに大きく頷いたりしている様子が見られた。このような教員間での認識共有の場を設定することの必要性が確認された。さらに、2022年度の校内研修に向け、共通理解ができたことや実践への意欲を感じることができた。全教員で創り上げた校内研修テーマに基づき学校全体で取り組んでいくという協働体制を築き、2022年度へつながる研修となったと考えられる。

〈研修委員会〉

研修委員会でワークショップの事前のリハーサルを行ったことにより、協議をする上で配慮すべき点が明らかとなり、見通しをもって校内研修全体会を実施することにつながった。

2 校内研修テーマに基づく授業づくり（2022年度1学期）

1学期は、4回の一人1授業を実施し、実施に合わせて計画的に研修委員会、校内研修全体会を設定した（表3）。

〈一人1授業・相互授業参観・授業研究会〉

時間割調整により、全員が参観可能な状態で公開を行う計画であったが、学校行事等の兼ね合いもあり、計画通りの実施が困難なこともあった。そんな中、授業内容を調整し

日時	内容	実施形態
12/24 (金)	(1) -① 1/11の校内研修全体会の事前準備 ・生徒の実態に対する認識の共有のための事前準備として、教員に生徒の実態の付箋紙への記入を依頼する。	職員 打合わせ
1/6 (木)	(1) -② 研修委員会の運営・1/11の事前準備 ・研修テーマ作成までの計画について提案する。 ・1/11の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施する。	研修委員会
1/11 (火)	(1) -③ 生徒の実態の共有・課題の生成 ・教員一人一人が捉える生徒の実態を共有し、その背景にある要因を探る。	校内研修 全体会
1/27 (木)	(1) -④ 1/11の協議内容の整理・集約 ・1/11の校内研修全体会の協議内容の整理・集約を行い、生徒の課題を明確にする。 (2) -① 2/7の事前準備 ・2/7の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施する。	研修 委員会
2/7 (月)	(2) -② 目指す生徒像の確立 ・「生徒の実態」から、「目指す生徒像」について考える。	校内研修 全体会
2/22 (火)	(2) -③ 2/7の協議内容の整理・集約 ・2/7の校内研修全体会の協議内容の整理・集約を行い、目指す生徒像を確立し、研修テーマを設定する。 (3) -① 2/28の事前準備 ・2/28の校内研修全体会でのワークショップのリハーサルを実施する。	研修 委員会
2/28 (月)	(3) -② 目指す生徒像に迫るための手立ての具現化 ・目指す生徒像に迫るための手立てについて考える。 (4) 2022年度の校内研修 ・2022年度の校内研修の進め方について説明し、共通理解を図る。（大学院での課題研究について説明）	校内研修 全体会
3/15 (火)	(3) -③ 2/28の協議内容の整理・集約 ・2/28の校内研修全体会の協議内容の整理集約を行い、目指す生徒像に迫るための手立て具現化する。 (3) -④ 研修テーマの設定 ・ここまで実施した研修委員会・校内研修全体会の協議内容を整理し、2022年度の研修テーマを設定する。	研修 委員会

表2 2022年度の校内研修に向けた準備段階の計画

て参観するなど、協力を得ることができた。

授業研究会では、付箋紙の記述が曖昧なもので、生徒の姿が具体的に記述されていなかったり、一人1授業の授業参観のポイントが明確でなかったりしたことで、授業研究会が一般的な話し合いで終わり、深まっていけない状況が見られた。また、付箋紙の記述が少なく、授業研究会での発話が少なくなってしまうこともあった。

2学期の実践では、再度、具体的な生徒の姿から、授業を考えていく意図を確認する機会を設定し、付箋紙の記述にも生かして

いけるよう働きかけを行うこととした。さらに、参観時にメモがとれるように参観シートを準備し、付箋紙の量の増加と、記述内容の改善を図っていくこととした。

〈研修委員会〉

計画段階では、研修委員会を協働プロセス支援の場として位置づけ、校内研修全体会での協議内容を整理・集約し、教員にフィードバックすることで、協働プロセスを推進させていく役割を担うものとした。しかし、実際は校内研修全体会での授業研究会がうまくいくように相談したり、実際にリハーサルをしたりする場としての役割が中心となり、協働プロセス支援の場としての役割を担うことができなかった。実践を振り返り、どちらの役割も、勤務校には必要であると感じた。

2学期は、協働プロセス支援の場として、授業研究会でのグループ協議からの学びを研修委員会でも再度集約し、全体にフィードバックしていく機能も担えるように取り組んでいくこととした。

3 校内研修テーマに基づく授業づくり (2学期)

2学期は、夏休み中の研修委員会で検討した計画で3回の一人1授業を実施した。全教員が参加できるように計画した日程ではあったが、出張や外部との関わりの中で行う授業などにより、実際には全員参加で行うことはできなかった。しかし、2学期の始めに予定を確認したことにより、見通しをもって取り組んでもらうことができた。

〈一人1授業・相互授業参観・授業研究会〉

授業研究会のもち方とともに、付箋紙の記述の仕方について確認する機会を設定し、付箋紙の量の増加と記述内容の改善を試みた。3回の授業研究会では、付箋紙の記述内容の変化や、発言内容に生徒の具体的な姿が現れるようになってきたのを感じることができた。授業者・参観者ともに、授業参観のポイントを意識し、共有して授業研究会を進めていくことが大切であることが明確となった。しかし、ファシリテーターの協議の進め方

	一人1授業者	校内研修全体会	研修委員会
(1)		4/11 (月)	4/6 (水)
(2)	5/10 (火) 筆者「3年数学」	5/16 (月)	5/12 (木)
(3)	5/26 (木) 1年担任「1年道徳」	5/26 (木)	5/31 (火)
	※前期指導主事学校訪問日に一人1授業として実施し、授業研究会を行った。		
(4)	6/6 (月) 教務主任「1年国語」	6/13 (月)	
(5)	6/14 (火) 2年担任「2年道徳」		
	※一人1授業ではないが、授業公開、相互授業参観を実施した。授業研究会は行わなかった。		
(6)	7/4 (月) 3年担任「3年道徳」	7/4 (月)	7/1 (金)
	※地区別人権教育研究協議会の授業づくりの一環として、東部教育事務所指導主事の訪問に合わせて実施した。		
(7)			7/14 (木)

表3 2022年度1学期に実施した校内研修

	一人1授業者	校内研修全体会	研修委員会
(1)		8/25 (木)	
(2)	8/30 (火) 2年担任「2年道徳」	9/5 (月)	※学校行事等により実施できず。
(3)	10/11 (火) 2年主任「1年社会」	10/17 (月)	11/1 (火)
(4)	12/6 (火) 1年主任「1年音楽」	12/6 (火)	12/15 (木)

表4 2022年度2学期に実施した研修

により、話し合いが授業参観のポイントからずれてしまう状況も見られ、授業研究会前にファシリテーター同士が打合せをしっかりと行うことや、新たなファシリテーターを育てていくことも必要であることが課題として見えてきた。

〈研修委員会〉

研修委員会の中で、校内研修全体会での協議内容を整理・集約できるように振り返りを行い、研修資料としてまとめることで教員にフィードバックし、協働プロセスを推進させていけるようにした。配付された研修資料に、各教員がしっかりと目を通している様子が見られフィードバックの機能を担うことができたと感じる。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果と課題

本研究の成果と課題を明確にするため、実践2年目の12月に教員に対するアンケート調査と研修委員へのインタビューを行った。そこから、リレー形式での一人1授業の公開は、12月までの期間、校内研修テーマを意識して授業を行うことにつながっており、その意義は大きかったことが確認された。さらに、指導技術や指導法など、他の教員のよさを学ぶ機会となり、各教員の授業改善につながっていたと考えられる。また、授業研究会では、回数を重ねることにより、情報交換が活発になり、教員間のコミュニケーションの活性化につながってきたと考えられる。

一方、課題として、授業を参観されることに慣れていない教員にとっては、負担感が大きかったことも考えられる。今後もこの取組を継続し、授業を公開し検討することを習慣化し、資質向上を図っていく必要がある。さらに、授業研究会では、ファシリテーターの協議の進め方により、曖昧な一般論で終わってしまったり、話し合いが授業参観のポイントからずれてしまったりする状況も見られた。授業研究会をより充実したものにしていくためには、ファシリテーターの存在が重要であるため、授業研究会に先だって、ファシリテーター同士が打合せをしっかりと行うことや、新たなファシリテーターを育てていくことも必要であることが課題として見えてきた。

本研究では、小規模校の利点を生かし、一人1授業・相互授業参観・授業研究会を全教員で実施することにより、学び合う教員集団づくりを行うことに一定の成果を得ることができたと考えられる。全教員で目的を共有して教育活動に取り組んでいくことは、授業力の向上だけでなく、学校の教育力そのものを向上させていくうえで重要である。本研究の実践のみで終わらせるのではなく、今後も小規模校の利点を生かした取組を継続し、教員同士の学び合いを促進させる方策を模索していきたい。

Ⅳ 参考文献

- 浦野弘・南部昌敏「授業実践力の向上を目指した校内研修の活性化に関する研究 ―校内授業研修を成功に導いた事例を通して―」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第39号 PP.115-125 2017
- 加藤鋭之「教員の資質能力向上を目指した校内研修に関する研究―小規模校における同僚性を重視した授業研究の在り方」愛知教育大学教育実践研究科（教職大学院）修了報告論集 PP.321-330 2013
- 佐古秀一・曾余田浩史・武井敦史『学校づくりの組織論』学文社 2011
- 村上雅弘『ワークショップ型教員研修 はじめの一步』教育開発研究所 2016
- 文部科学省『公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引き』 2015
- 中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』 2021